

第五章

結論及び今後の課題

5.1 結論

前章のデータを処理に基づいて、『さくら』教科書を分析した結果次のようにまとめることができる。

1. 現行の日本語のカリキュラムの観点から見れば、本教科書は全体的にカリキュラムに適合するのだが、第50課から第55課までのテーマがズレており、Indikator「目標能力記述」と本教科書の内容も合わないところもあると結論する。
2. コミュニカティブ・アプローチに反省する教材は目標言語の自然さ、オーセンチック、状況文脈の有無、言語技能の統合性、目標の文化の要因に強い関係を持っている。内容を分析した結果、本教科書に載せているダイアログや読解文は現実の日本社会で使用しないものが多いのである。また、ダイアログ文のなかでも、状況文脈ははっきりに説明されていないのである。言語技能に関して、本教科書にはほとんどの活動は各技能を個別に指導する（Segregated Instructional Skill）傾向が高い。統合的な言語活動（Integrated Instructional Skill）はあるのだが、読み技能と書く技能に限っている。本教科書には日本の文化を含んでいるのだが、4つの言語技能の活動に統合されていなく、日本文化はサプリメントとして扱われると明らかにする。それらの要因の観点から踏まえて、本教科書はコミュニカティブ・アプローチの概念と離

れており、構造言語学の概念に影響を受けられ、言語の正確さに中心する傾向が高いと明らかにする。

3. コミュニカティブ・アプローチの概念と離れているということから、日本語を教えるために、本教科書を使うことが悪点になってしまうとはいえない。コミュニカティブ・アプローチは何十年前から現在までに世界中の外国語教育の中でよく使われているといわれるのだが、このアプローチだけで日本語を習得できるという意味ではないのである。本教科書の内容を見れば、高いレベル日本語能力の教師の資格を要求しない。また、教師側特に経験が浅い教師たちに対して『教師指導書』（Buku Skenario Pembelajaran）があるので、どのように高校生に日本語を教えるのかをガイドとして扱われる。

5.2 今後の課題

1. 日本語の教科書の著者・出版社に対する

- (1) 外国語教育には学習の過程の中で教科は重要な役割を持っているため、教科書の内容は最近はやっているし、効果な外国語の学習を支えるアプローチやメソッドを採用する考慮が必要である。
- (2) 教科書を作成する際、教科書の内容は絶対的に現行のカリキュラムに基にするはずである。したがって、カリキュラムのズレ

がないように、教師や出版社など教科書を作成する側はこのことに対して、注意しなければならない。

1. 次の研究に対する

本研究ではコミュニカティブ・アプローチを応援する応用言語家の理論に基づくに限って、分析した。今後の研究は教師・学生に対するアンケート、インタビュー、日本語の学習に観察など研究用具を使用して、研究を進めたい。

